

インドネシア共和国東ジャワ州シドアルジョ地域における熱泥流被災者のエンパワメント

活動地域  インドネシア

ひろげる助成

3年目

実践

乾季・雨季各24地点に金属板設置 **48地点**

生物分解性水質浄化装置 **2か所**

今年度計画の達成度 **85%**

目標達成度 **80%**

苦労した点と工夫した点

■ 苦労した点

新型コロナウイルス禍に伴う「大規模な社会的制限」政策により、被災者住民と行政担当部局との定期会合が開催できず、行政からの情報の共有や必要な支援が得られなくなった。

■ 工夫した点

セミナーやワークショップは、村の会場とZoomで結びオンラインで開催し、行政の担当者を招待した。ファクトシートを改訂し、行政やメディア関係者などに配布した。



大気モニタリング用金属板を住民自身が評価

課題

2006年5月に東ジャワ州シドアルジョで発生した熱泥流噴出事故は、8村2万世帯もの避難者を生みながら今日も噴出を続けており、周囲の村人は環境汚染に苦しんでいる。

目標

熱泥流による環境汚染の影響低減のための技術的・社会的・経済的スキルを住民が身につける。そのため①環境汚染の実態把握 ②汚染の影響低減 ③生業構築の支援を行う。

活動内容と成果

- ①銀板・銅板を用いた大気モニタリングは住民のみで実施できるようになった。また、重金属や芳香族炭化水素のサンプリングも専門家の指導の下、住民自身の手で行っている。バイオモニタリングは地元の高校生への環境教育とタイアップして実施した
- ②地元の植物種のうち汚染浄化が見込める樹種を特定し、生物分解性水質浄化装置2基の建設・稼働を行った
- ③水耕栽培と魚養殖を組み合わせたアクアポニックスが軌道に乗りつつある。プラウィジャヤ大学の研究者やNGOとの連携は進んだが、行政・ジャーナリストとの連携は一部に留まった



水草を用いた水質浄化システムの一つ

全助成期間の活動を振り返って

新型コロナウイルス禍による制限が大きな障害となった。行政やメディア、専門家を招いての大規模なフォーラムが開催できなくなり、活動の目標だった被災者支援のプラットフォームを構築するまで至らなかった。住民自身による環境モニタリングはほぼ定着し、生物種を用いた環境観察も高校や専門学校と提携し、環境教育としての役割を担った。魚養殖と水耕栽培を組み合わせたアクアポニックス事業は、収穫実績を上げており、住民の評価は高い。



水耕栽培の講習風景。施肥について学ぶ住民

Jalan KH Khamdani Siwalanpanji No 13C Buduran
Sidoarjo, Jawa Timur, Indonesia 6125200
HP : <https://remedi-sidoarjo.eutenika.org/>



今後の展望

①環境モニタリング事業は国立プラウィジャヤ大学の研究者が中心の環境優生学会の指導を得て続行予定 ②生物分解性を用いた水質浄化システムは実績を上げており、住民からの要請も高いので今後の拡大が望める。重金属吸着実験については引き続きデータの収集を行う ③新型コロナウイルスが収束次第、被災者住民と行政担当部局との定期会合を再開し、今後の連携を図る。当面は貧困者向け無料健康保険制度の被災者への適用を目指す